

沖の島 昭和43年10月21日～酒井明 説話集 14※～

昭和43年頃と言えば、沖の島は「孤島の太陽」という映画撮影のため、宇野重吉さんをはじめ、当時活躍されていた俳優さんが来島し、なかなかぎやかなものであった。ぼつぼつではあっても、観光沖の島としての素地が認められてきたといってもよい時期であった。

そうした中で43年10月21日という日は、記念すべき一日になったのではなかろうか。

この日まで、母島の里に響き続けた発電機の音が消え、海底ケーブルによる送電が始まった日である。

耳なれぬ者にはずい分騒々しい音だったが、その音も聞こえなくなると、何かしばらくは気抜けした程に馴染んでおった。冷却水が程よく温められて放水路に流れ出る。せき止められた放水路の一部が格好の温泉であった。

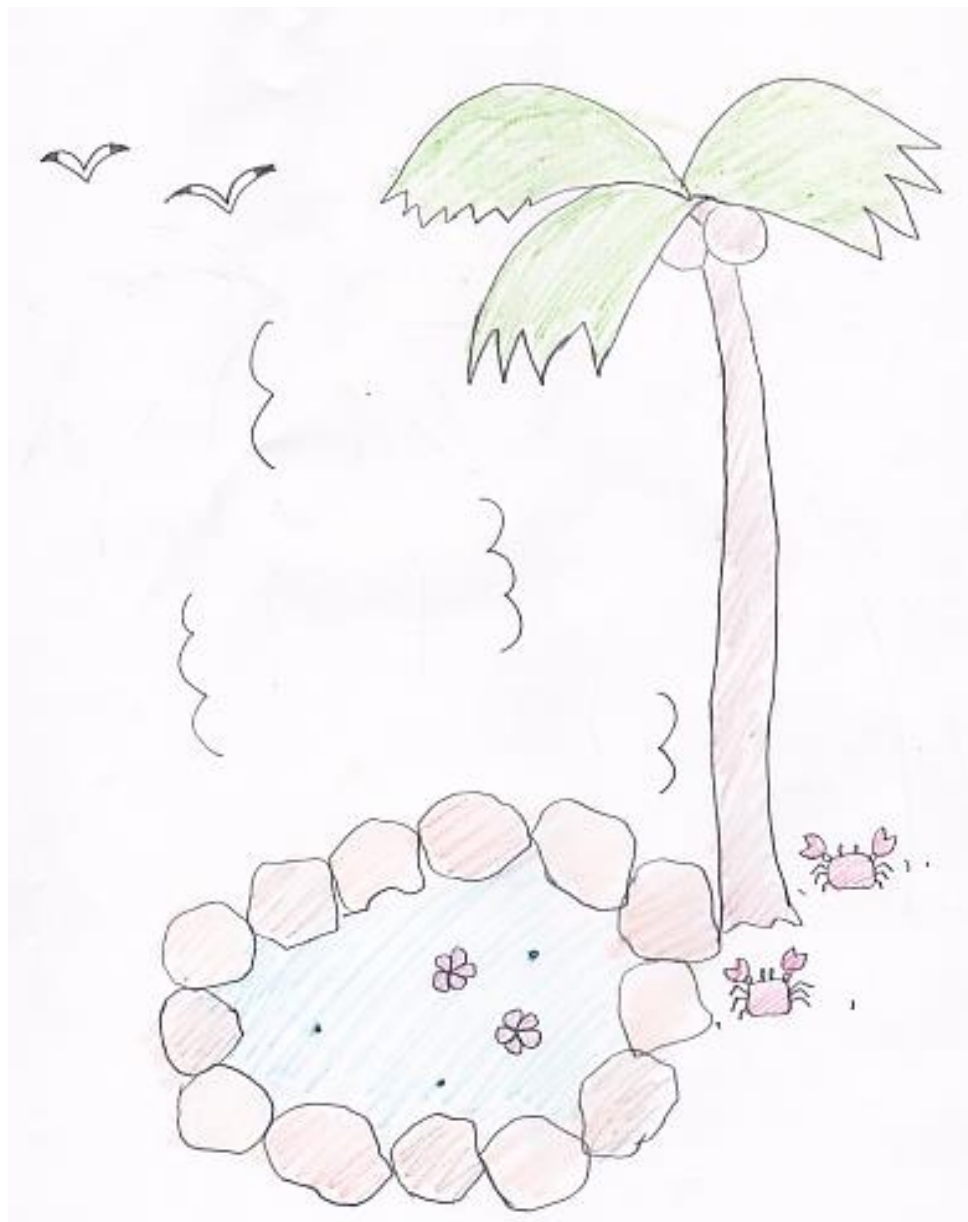
天井は発電所の床の一部といってもよいコンクリート作りだが、周囲は自然のままの岩風呂といった風情である。4、5人は一緒にゆったり入ることができた。

夏は夏で、海からあがって温水風呂がシャワー代わり、はたまた北風が豊後水道を吹き抜け、潮と一緒に港の口から上がってくる日でも、ゆったりひたって岸壁に出る。白い波頭を後から追い立てる風が、かえって快かったものである。一般家庭の風呂では、味わうことのできない風流なものだった。

使用料が必要ということだったらしいが、一声かけておくだけで、どうも納めた記憶は残っていない。補修費の足しにでもと、いくらか出したようだが判然としない。

その温泉風呂も、発電機の音と一緒に姿を消してはや数十年になる。

当時のことを知る親しい人たちの間で、今でもそのことが話題になる。島を訪れる人々はずい分増加したが、あんな温泉風呂が残っておればおそらく名物の一つになったのではなかろうか。



※) 平成 26 年 3 月に逝去された宿毛市出身の酒井明さんは、長年教鞭をとる中で地域伝承や動植物の生態のフィールドワークを重ね、退職後も宿毛市文化財保護審議会（当時）長などを歴任、益々研究を深めながら観察日誌や説話、伝承技術などを膨大な手書き原稿にまとめられました。

ご遺族より宿毛歴史館に寄贈された原稿から、順次「酒井明説話集」として公開してまいります。